

二次元可能世界意味論の展開（２）

——チャルマーズとジャクソンの認識的二次元主義——*

佐金 武

1. はじめに：アприオリ性と必然性の再接続

「二次元可能世界意味論の展開（１）」に見たように、様々な古典的理論は、特定の種類の表現に限定して二次元的枠組みを適用し、アприオリ性の部分的説明を与えていた。これに対して、チャルマーズ(Chalmers 1996, 2004, 2006)やジャクソン(Jackson, 1998, 2004)らが提唱する認識的解釈は、二次元的な説明は固有名を含むどのような種類の表現にも一般的に適用可能であると主張する点において、より強い二次元主義である。あらゆる表現には二次元的に説明される二つの内包が伴う限り、それにより構成されるすべての文もまた（合成性の仮定の下で）二つの内包が伴うとされる。そして、認識的二次元主義の最大の特徴は、二次元的枠組みを認識的な概念を用いて特徴付けることによって、ある言明のもつ二つの内包のうち一方の必然性は一貫してアприオリ性と等価なものとして扱うことができるという主張にある。つまりここにおいて、様相概念は二種のものに分類され、そのうちの一方は認識的概念へと連結される。このことは、様相概念と認識的概念の間の断絶を説いたクリプキからの教訓を踏まえると、かなりセンセーショナルに思われるだろう。以下、チャルマーズとジャクソンの認識的解釈を概説し、その哲学的見解の明確化に努める。

2. 認識的解釈による二次元的説明：認識的内包と通常の内包、そして中核をなすテーゼ

認識的二次元主義の第一の主張は、あらゆる表現には二次元的に説明される二つの内包が伴うということだ。チャルマーズはこれらを、**認識的内包**と**通常の内包**として区別する。また、ジャクソンは、この区別に対応するものとして、**A-内包**（「A」は「現実的な（actual）」の略）と**C-内包**（「C」は「反事実的な（counterfactual）」の略）を導入する。認識的内包（またはA-内包）は、ある主体と時点に中心化された可能世界（centered worlds）あるいは現実として考えられた可能世界（actual worlds）から外延への関数と定義される。これらの可能世界は、「二次元可能世界意味論の展開（１）」の冒頭において一次元の可能世界として説明されたものに対応し、**シナリオ**（scenarios）と総称される。したがって、認識的内包は一次内包に相当する。これに対して、二次元の世界は**反事実的な可能世界**（counterfactual worlds）として区別される。通常の内包（またはC-内包）は、これらの反

事実的な可能世界から外延への関数と定義され、二次内包に相当するものである。すべての表現にはこの二種の内包が伴うのに応じて、あらゆる言明も二つの内包を持つとされる。

認識的二次元主義の第二の主張は、アプリアリ性はある仕方での必然性として理解されるということである。その手順は、次の通りである。まず、ある言明の持つ認識的内包がすべてのシナリオにおいて真であるとき、それは必然的な認識的内包をもつといわれる。また、ある言明の通常の内包がすべての反事実的な可能世界において真であるとき、それは必然的な通常の内包をもつとされる。そのとき、以下のような定式化が与えられる。

(アプリアリ性 = 認識的内包の必然性)

任意の言明 S がアプリアリであるのは、 S が必然的な認識的内包をもつ(すべてのシナリオにおいて真である)ときかつそのときに限る。

(形而上学的必然性 = 通常の内包の必然性)

任意の言明 S が形而上学的に必然であるのは、 S が必然的な通常の内包をもつ(すべての反事実的な可能世界において真である)ときかつそのときに限る。

重要なことは、アプリアリ性は認識的内包の必然性と等価であるという第一のテーゼである。(それに対して、第二のテーゼが意図するのは、クリプキ的な通常の必然性についての定式化である。)

「アプリアリ性 = 認識的内包の必然性」という上の主張は、認識的二次元主義の中核をなすテーゼである。このテーゼが成功を収めるためには、認識的内包として導入される一次内包を徹底して認識的概念への依存によって特徴づけ、この内包の必然性が確かにアプリアリ性を表していることを示す必要がある。次節では、二次元的枠組みの認識的解釈の内容を具体的に見ていくことにしよう。

3. 認識的概念への依存の二つの側面：シナリオと判読可能性

チャルマーズによれば、認識的内包は、二つの仕方で認識的概念に依存する。一つの依存は、認識的内包の必然性を定義する際に量化されるシナリオは、「世界がそうであると判明するかもしれない」という、ある主体にとっての認識的可能性に対応することに見出せる。もう一つの依存は、ある言明の認識的内包があるシナリオにおいて真であることは、「そのシナリオがどのようなものであるかを一度知れば、我々はそこからその言明の真偽を決定できる」という、判読可能性 (scrutability) の観点から定義されることに見出せる。

認識的二次元主義によれば、シナリオとは概ね、最大限に特定の認識的に可能な仮説に対応する。ここで、認識的に可能とは、我々に理解可能な仕方と与えられており、合理的思考に照らして明らかな矛盾が含まれていないということである。また、最大限に特定のであるとは、与えられた仮説に曖昧なところがあってはならず、それが最も詳しい情報を有しているという条件に他ならない。ところで、あるシナリオを現実として考えるとは、何らかの仮説的記述のもとにそれを把握することだとチャルマーズはいう。そのような記述は、**正準的記述** (canonical descriptions) と呼ばれ、意味論的に中立な語句による完全な記述が意図される。意味論的に中立な語句とは、反事実的な世界での外延が、現実世界がどのようなものと判明するかに依存しない表現に限定される。このような語句が具体的にどのようなものかは明らかにされていないが、「水」や「宵の明星」などが意味論的に中立ではないことは明らかだろう。また、完全な記述とは、ある文を種として、そこから構成される文の極大無矛盾な (maximally consistent) 集合である。こうして、最大限に特定のであるような認識的可能性は、認識的に完全な記述に置き換えられる。

このような記述を実際に与えることが可能かどうかは不透明である。後に見るように、完全な記述に必要とされる語彙を確定するためには、世界の内在的特徴についての形而上学的考察が必要だからである。しかし、ひとたびこの課題が遂行された後は、シナリオの正準的記述は原理的には可能なはずである。ところがまた、シナリオに対応する正準的記述を与えることができるとしても、正準的記述に対応するシナリオが必ず存在するということに関しては疑問の余地があるかもしれない。この疑念を払拭するために、チャルマーズは、正準的記述そのものをシナリオと見なせばよいと示唆する。そのとき、シナリオの空間は、認識的に可能な正準的記述からなる空間と同一視することができるという。

認識論的概念への依存の第二の側面は、判読可能性あるいは**含意関係による記載** (entry by entailment) と呼ばれるものによって特徴づけられる。以下にこれを説明しよう。まず、チャルマーズとジャクソンによれば、アプリアリ性の一般的特徴とは、合理的反省だけにもとづいて判断可能であって、それ以上の経験的事実を必要としないということである。ここで、ある言明がアプリアリであることと、何らかの推論がアプリアリであることをとりあえずは区別しよう。判読可能性は推論のアプリアリ性に関わるが、本節末部で確認されるように、言明のアプリアリ性はこの判読可能性の観点から統一的に説明可能だという。

判読可能性は、実質条件文「 P ならば Q 」という推論の正しさがアプリアリであること、すなわち合理的反省のみから導かれることを述べている。ここで、条件文の前件としてあるシナリオの記述をとるならば、そこに含まれている然るべき情報は合理的反省のみによって引き出すことができるはずである。たとえば、「ジョーンズは6フィートであり、スミ

「スは5フィートである」という仮説的記述が与えられたとき、「ジョーンズはスミスよりも背が高い」や「二人の平均身長は5.5フィートである」等々の言明が真であることは、それ以上の経験的探求なしに簡単な数学的思考のみによって推論できる。そして、仮説的記述が他の事柄についても最も詳細であるときには、どんな有意義な言明についても、その記述の下での真偽は原理的にアプリアリに得られるだろう。以上のことから、ある言明の認識的内包があるシナリオにおいて真であるということは、次のように定義される。

(アプリアリ性による認識的内包の定義)

ある言明 S の認識的内包がシナリオ w において真であるのは、実質条件文「 w の正準的記述 D が与えられれば S 」がアプリアリなときかつそのときに限る。

上の定義において推論能力の果たす役割を、チャルマーズは、 D から S が読みとられるということ(判読可能性)として着目し、またジャクソンは、 S は D により含意されるゆえに暗にそこに記載されているということ(含意関係による記載)として強調するのである。

ところで、チャルマーズとジャクソン(Chalmers & Jackson, 2001)は、正準的記述とは具体的にどのようなものかということは、認識的二次元主義それ自体が抱える問題と見なされるべきではなく、「シリアスな形而上学」に属する問題だと考える。とりわけ、正準的記述のためにどのような語彙が必要とされるのかということはむしろ、判読可能性の観点から明らかにされるべきである。このような語彙の候補としては、物理学用語、現象学用語、指標的情報等々が挙げられるだろう。物理主義者なら、世界の物理的記述のみから有意義な言明すべての真偽が判定できると考えるはずである。これに対して、物心二元論者は、世界の現象学的記述も客観的地位を持つのであり、現象学に関わる言明の真偽は物理的記述のみからはアプリアリには得られないと反論することができる。このように、正準的記述によって意図されることは、様々な形而上学的立場によって異なりうる。

また、正準的記述の完全性が、我々人間の認知的限界のゆえに、当面保証されないことはありうる。しかし、このことは、あるシナリオからそこでの言明の真偽を判定することができるとする、判読可能性を脅かすことはない。ある言明の真偽が不完全な記述からは読みとれないということは、判読可能性に対する反証にはならない。というのも、判読可能性の眼目は、完全な記述が与えられたとすれば、そのときどんな有意義な言明についても、その真偽を合理的反省のみによって導くことができるということだからである。

さて、アプリアリ性と認識的内包の必然性との接続は本当に果たされたのかということを確認しておこう。まず、ある言明 S がアプリアリであるとは、世界がどのようなものと

判明しようとも(経験的事実に依存せず)その真であることが判断可能だということである。このことは、すべてのシナリオ w について、その正準的記述 D は S を含意することが判読可能性により明らかだということに他ならない。したがって、認識的内包の定義により、 S はすべてのシナリオにおいて真ということになる。よって、 S は必然的な認識的内包をもつといえる。また、 S がアプリアリではないとは、その否定が排除できないということだ。その際、この否定文を種として構成される正準的記述が存在する。それゆえ、 S はこの記述に対応するシナリオ w において偽であって、必然的な一次内包をもたない。いずれの場合も、認識的次元主義においては、中核をなすテーゼは満たされる。

4. 古典的解釈から認識的次元主義へ

以上に見たように、認識的次元主義の提唱者たちは、アプリアリな言明を統一的に説明するような二次元的枠組みの解釈が必要と考える。この目的のためには、従来の解釈では不十分であって、認識的解釈へシフトすべきことを以下のように例証する。

第一に、あらゆる表現について二次元的な説明を認めない立場では、いくつかの言明についてアプリアリ性と必然性の結びつきが失われる。たとえば、「水 = H_2O 」という言明は双子地球シナリオが与えられたときには偽であると結論することができ、よって、アポステリアリなはずである。にもかかわらず、自然種名については二次内包のみを認める立場では、それは必然的な言明であらざるを得ず、中核をなすテーゼは破綻する。同様にして、「ヘスペラス = フォスフォラス」のような同一性言明についても、宵の明星が明けの明星ではないようなシナリオが与えられたときには偽であって、それはアポステリアリなはずである。ところが、その言明に現れる二つの名前が二次内包しか持たないとする立場では、これは必然的な言明に他ならない。これらの困難は、認識的解釈のもとでは乗り越えられる。というのも、認識的次元主義においては、あらゆる表現には二つの内包が伴うと考えられているからであり、上で問題になった類の言明についても、認識的内包の必然性と通常の内包の必然性の区別に基づく説明が可能になるからだ。

第二に、一次元の可能世界を「発話の文脈」として解する従来の解釈——チャルマーズはこれを**文脈的解釈**と呼ぶ——では、発話そのものに纏わる困難が生じる。一次元の可能世界を可能な発話の文脈に限定するなら、たとえば、「私は存在する」、「誰かが発話する」等々の文トークンはすべて真であり必然的な一次内包をもつ。このとき、必然的な一次内包がアプリアリ性を表すと仮定すれば、これらのトークンはアプリアリということになる。しかし、発話の文脈によって決定される「私」や「誰か」の指示対象が存在したり発話したりすることは明らかに、アポステリアリな事実だろう。したがって、文脈的解釈では、

一次内包の必然性とアプリアリ性を同一視することはできない。ところで、認識的二次元主義は、一次元の世界として導入されるシナリオに対して文脈に限定的な立場をとらないので、これらの言明が偽でありうることを排除しない。シナリオは、発話者の存在しないような可能性を含め、より広い様々な認識的可能性をカバーする。それゆえ、「私は存在する」の一次内包は偽であることもあり、アポステリオリと見なすことができる。

第三に、語と概念の一定の結びつきを保証しないような理論では、アプリアリなはずの言明の一次内包が偽になることがありうる。たとえば、語「2」に対して我々が理解する概念2ではなく概念4が結びついたり、語「3」に対して数概念以外の概念が結びついたりすることを許容するような理論では、「 $2+3=5$ 」という数学的言明の一次内包が偽になることがある。確かに、記号としての語とその意味は、一意的な結びつきを持たない。しかし、認識的二次元主義が捉えようとするのは、語と意味との結びつきのこのような任意性ではない。語が何を意味するのであれ、それは何事かの公共的な概念を伝達するために用いられるはずである。そして、認識的内包と呼ばれるのはこの概念のことなのである。認識的二次元主義は、「 $2+3=5$ 」によって一定の概念（概念2や概念3、そして概念5等々）を把握する主体を問題にするのであり、そのような主体にとっては、この言明はアプリアリかつ必然的な一次内包をもつといえる。

さて、これらの例証によって、古典的解釈から認識的二次元主義へのシフトが本当に促されたことになるのだろうか。もちろん、チャルマーズやジャクソンはそう考えている。彼らは、アプリアリな言明を統一的に説明するような二次元的枠組みの解釈が必要と主張しているからである。しかし、反論者はこの主張に対して、直接批判を向けることができるだろう。本論に続く「二次元可能世界意味論の展開 (3)」では、認識的二次元主義に対する批判的見解を紹介し、問題の争点をより深く考察しよう。

註

* 本論は、「二次元可能世界意味論の展開 (1)」(小草)に続く、一連のサーベイの中間論文に当たる。ここでの用語のいくつかは、先立つ小草論文から継承した。チャルマーズとジャクソンの認識的二次元主義に対する批判の紹介は、本紙掲載の「二次元可能世界意味論の展開 (3)」(藤川)を参照せよ。

文献

- Chalmers, D. J. (1996). *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*, Oxford University Press, Oxford.
 (2001, 林一訳, 『意識する心』, 白揚社.)
 ——— (2004). 'Epistemic Two-Dimensional Semantics', *Philosophical Studies*, 118, 153-226.
 ——— (2006). 'The Foundation of Two-Dimensional Semantics', in M. Garcia-Carpintero & J. Macia (Eds.),

- Two-Dimensional Semantics* (pp. 55-140), Oxford University Press, Oxford.
- Chalmers, D. J. & Jackson, F. (2001). 'Conceptual Analysis and Reductive Explanation', *The Philosophical Review*, 110, 315-360.
- Jackson, F. (1998). *From Metaphysics to Ethics: A Defence of Conceptual Analysis*, Oxford University Press, Oxford.
- (2004). 'Why We Need A-intensions', *Philosophical Studies* 118, 257-277.

〔京都大学大学院博士課程・哲学〕